

子が発展して行った要因として、千家を始めとする茶道の家元が存在し、茶会などに茶菓子が大いに用いられたこと、そして宗教都市でもある京都では、寺の総本山や神社にも多くの行事や祭事にも大いに用いられたこと、また京都の周りの近江や丹波などその気候が菓子の原料に適合して上質ものが産出されたことなどがあげられます。特に茶菓子による京都趣味の優雅さとすぐれた技術が生み出されました。京菓子は、目で色や形を、舌で感触と味を、鼻でその香りを、耳で菓子の銘（名前）を聞くなど、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚の五感で味わう物とされています。季節を4つに分けて、さらにそれを細かく、2週間ごとに分けた二十四節気において菓자에季節を表現することが一番大切な事とされています。

1839（天保10）年に刊行された『古今新製菓子大全』には、200種の蒸し菓子、干菓子など今の菓子図示と製法が記され、今日の和菓子の基本はほとんど完成されました。しかし砂糖はまだ貴重品であるため菓屋で売られていたとのことです。江戸後期になり庶民も菓子を楽しむようになりました。

明治時代になり、工業や生活用式も西洋化していき、多売主義が発生するとともに洋菓子を並売する菓子屋も増えてきました。これも和菓子の成長にとって大きな影響をもたらしました。大正、昭和と全国で和菓子も定着していきました。第2次世界大戦中は、砂糖が手に入らず、閉店状態の店がほとんどでしたが、その後砂糖の配給制度を経て昭和20年後半には、平静を取り戻し、茶道の一般化とともに茶菓子も広く知られるようになり今日に至っています。

次に「包む歴史」についてお話しします。水引の起源は、遠く飛鳥時代にさかのぼります。最初の遣隋使である小野妹子が帰朝の際、隨の答礼使が携えてきた贈り物に、海路の平安無事を祈って紅白の麻紐が結ばれていました。以来、宮中への献上品はみな紅白で結ぶ習慣となりこれが水引の起源とされています。当時この麻紐は「クレナイ」と呼ばれていました。平安時代貴族達が和歌を楽しむ際に「クレナイ」を紫や黄色などに染めて、歌集の綴

じ紐として使っていました。その美しさが鴨川を百花が水に引かれて流れていく様子から「水引」と呼ばれるようになりました。水引細工は、その本来の縁起に由来する役割から、吉祥思想や蓬莱思想の影響を強く受けていて、蓬莱というユートピアに、その幸福や長寿などの象徴している「鶴亀」や「松竹梅」などをモチーフにした細工が多いのです。日本人は、「結ぶ」ことに対して深い思いを込めています。「結婚」という言葉に代表されるように人と人の結び付きや生活習慣にも「結ぶ」という事に対して気を遣います。

ここで折形おりがみについて説明します。折形とは600年以上の歴史を持つ武家社会の礼法のひとつです。和紙を使い進物を包んで手渡すやり方と儀式に使う和紙の飾りを総称する呼称です。上級武家のみが使用していた特別な和紙を目的別に使い分ける日本独自の文化です。多彩な自然界の色を使った絹の文化が公家、それに対して自然界の生成りの分厚い楮こうぞの繊維で作られた和紙を使ったのが武家の和紙文化です。江戸時代になり、江戸や大阪を中心に商人文化が栄えると、武家は仕事を失い同時に門外不出であった折形礼法も寺子屋などで教えられて一般に普及していきました。全国の農家が副業で和紙をすくようになると和紙も一般に普及し、特に折形の粉包みなどの造形のおもしろさから単に形を折って楽しむ「遊戯折形＝おりがみ遊び」が急速に普及しました。物を包む礼法から形を作って楽しむあそびとして発展します。器用な日本人ならではの応用発展です。

明治以降は義務教育における作法の一環として折形を必ず学んだそうです。第2次世界大戦終了後、急速な欧米文化の普及に伴って学校教育から折形礼法は、突如消失してしまいました。以後百貨店などに頼めば贈り物を包装し、熨斗のしと紙を貼り付け、相手先に送り届けてくれる代行サービス文化が普及しました。

最後に風呂敷についてお話しします。「包む」と書いて「くるむ」とも読みます。「巻き込んだ状態」という意味合いが強いですが、この「くるむ」が「ころも」の語源ではないかと考えら